

4971 **メック**

前田 和夫 (マエダ カズオ)

メック株式会社社長

グローバル展開・開発力、品質保証体制の強化

◆2016年3月期第1四半期決算概要

当第1四半期の売上高は21億85百万円(前年同期比29百万円増)、為替の影響は約1億円増となっている。売上高の内訳は、薬品が21億12百万円(前年同期比1億7百万円増)、機械は29百万円(同11百万円増)、資材は意図的に減らした結果、40百万円(同84百万円減)という結果である。売上総利益は14億83百万円(前年同期比23百万円増)となった。

販売費および一般管理費は9億87百万円(同72百万円増)、主に人件費の増加によるもので、為替による影響は25百万円増である。その結果、営業利益は4億96百万円(同49百万円減)、為替による影響は21百万円増である。当四半期は為替差益が24百万円(前年同期は為替差損15百万円)発生し、経常利益は5億38百万円(同9百万円減)となった。

法人税等は1億62百万円(同59百万円減)、前年同期は台湾の留保金に対する税制改正により税額が多かったが、当四半期は正常な状態に戻り、四半期純利益は3億77百万円(同49百万円増)という結果である。

比較連結貸借対照表の状況は、全体に在庫が減少している。流動負債については、未払金2億85百万円(前年同期比54百万円減)は消費税等の納税による減少である。未払法人税等1億95百万円(同1億58百万円減)は納税による減少である。

当連結会計期間の負債純資産合計は145億89百万円となり、前連結会計年度比(2015年3月31日)で56百万円減となった。

キャッシュフローの状況は、営業活動によるキャッシュフローは売上債権が減少に転じたこと、および仕入債務が増加に転じ、3億67百万円(前年同期比4億4百万円増)となった。投資活動によるキャッシュフローは有形固定資産の取得による支出の増加により、マイナス2億43百万円(同40百万円減)となった。財務活動によるキャッシュフローは、配当金支払額の増加によりマイナス1億57百万円(同59百万円減)となった。上記の結果、現金および現金同等物の四半期末残高は39億50百万円(同13億47百万円増)となった。

◆海外売上高比率が拡大

当四半期のポイントとして、薬品売上高は21億12百万円、売上高に占める割合は96.7%(前年同期比3.7ポイント増)となった。海外売上高比率は54.7%(同3.5ポイント増)である。なお、当社薬品海外使用分の国内代理店販売を海外売上高に加算した場合の比率は75.1%(前年同期は68.0%)である。

中国向けのスマートフォンが停滞している関係でパッケージ基板の動きが若干鈍く、また、小型ディスプレイ、タッチパネル関係が伸び悩んだが、一方でテレビは順調に推移した。

四半期ごとの売上高推移を見ると、単体・連結ともに前期第4四半期とほぼ同程度、前年同期比では若干増となっている。営業利益は単体・連結ともに前期第4四半期で若干減少、当四半期は前期第3四半期と同レベルまで回復している。経常利益(連結)、四半期純利益(連結)ともに営業利益と同様の傾向を示している。

品種別四半期売上高推移は、その他 2 百万円(前年同期実績は 7 百万円)、資材 40 百万円(同 1 億 25 百万円)と減少したが、薬品は 21 億 12 百万円(同 20 億 4 百万円)、機械 29 百万円(同 18 百万円)と若干増加となった。

薬品別四半期売上高推移では、その他 7 百万円(前年同期実績は 4 百万円)、剥離剤 57 百万円(同 54 百万円)、フラックス剤 50 百万円(同 57 百万円)、防錆剤 37 百万円(同 32 百万円)、銅表面処理剤 19 億 58 百万円(同 18 億 54 百万円)、と、銅表面処理剤が順調に推移している。

別区分での薬品別四半期売上高推移では、その他表面処理剤 95 百万円(前期第 2 四半期実績は 1 億 7 百万円)、エッチング剤 7 億 29 百万円(同 7 億 77 百万円)、密着向上剤 12 億 87 百万円(同 12 億 79 百万円)と、前期第 2 四半期以降さほど大きな差はなく、ほぼ同様の傾向を示している。

CZ シリーズの四半期売上高推移では、CZ-8100 は 1 億 96 百万円(前年同期は 2 億 24 百万円)と減少しているが、高密度配線パターン向けの CZ-8101 は 5 億 98 百万円(同 5 億 17 百万円)と増加傾向が続いている。CZ-8101 は高密度対応、高付加価値ということで、利益率を落とさない、あるいは押し上げる 1 つの要因にもなっている。

地域セグメント別売上高推移は、日本 10 億 65 百万円(前期第 4 四半期は 10 億 27 百万円)、アジア 9 億 66 百万円(同 10 億 53 百万円)、欧州 1 億 52 百万円(同 1 億 7 百万円)となった。

2016 年 3 月期通期連結業績予想は、売上高 94 億 20 百万円(前期比 4.0%増)、営業利益 21 億 50 百万円(同 7.0%増)、経常利益 22 億円(同 3.3%増)、当期純利益 14 億 50 百万円(同 7.9%増)と、期初発表値から変更はない。

◆今後の事業展開について

尼崎事業所建設に関しては、製造・研究開発・営業・管理部門等を集約し、多様なチャレンジに対応するために、投資予定額約 40 億円で予定どおり進んでいる。

当社が活躍できる分野として今回、ウェアラブルとロボットを加えた。ロボットには CPU が入っており、これをつなぐネットワークへの投資が伸展することを期待している。ウェアラブルは、中長期的にはスマートフォンとセットで多分野での活用が見込まれる。当社も初期段階のウェアラブルに貢献している企業の 1 つである。

当社のコア技術は、物理密着技術(CZ シリーズ、V ボンド)や化学密着技術(フラットボンドシリーズ)、微細配線形成技術(サブトラエ法技術)、表面処理技術が挙げられる。

CZ シリーズはパッケージ基板に幅広く使われ、V ボンドは一般基板の高密度なもの、HDI 基板や車載基板に使用されている。

フラットボンドシリーズは、スーパーコンピューター向け、基地局向け等、高速伝送対応で適用が始まり、ようやく実績が積み上がり、順次拡大中である。パッケージ基板向けでは、現在の主力は CZ-8101 だが、CZ-8201 も近い将来使用が始まり、その先ではフラットボンドが適用されていく予定である。

EXE シリーズ(サブトラエ法技術)は、COF が順調に進み、非常に少量ではあるが COF 以外の分野で一部量産がスタートしている。

表面処理技術は、選択エッチング技術等で各種工法に使用されている。携帯端末筐体の製造工程の薬液として採用された金属表面処理技術「アマルファ」は、さらなる拡大を目指す。

ETS 工法は、CZ シリーズを初めとしてダイレクト処理レーザー前処理・後処理、ドライフィルム前処理で当社の薬品が売れるチャンスが出てくる新工法である。

テレビに関しては、当社の薬品が適用される機種が増え、順調に伸びている。次世代テレビの 4K が売れ始め、8K も今後展開すると考えている。また、ブラジル・中国・ロシアでデジタルテレビ化が本格的に進むことから、今後期待している。

通信では、次世代の 5G が、2010 年と比較して通信速度 100 倍、通信容量 1,000 倍と言われている。「世界に先駆け 2020 年に実現」という発表があり、フラットボンドを中心にチャンスが出てくる、また CZ のチャンスも増えると期待している。

車の安全運転をサポートするシステムは今後ますます進み、安く・軽く・自由に成形できる樹脂基板が求められることから、フラット処理が重要になるとみている。

金属表面処理技術「アマルファ」の主な市場の 1 つである自動車は、今後 CRP が多く使われるようになると見込まれ、当社は拡大する市場を視野に入れ、研究開発を進めている。電子基板製造関連分野では、ディスプレイを 1 つの柱に、樹脂金属接合関連分野等への拡大を目指していく。

これからも成長し続けるために、グローバル展開の強化、新製品の開発力強化、トータルな品質保証体制の強化に取り組み、競争力を維持・強化していく。

◆ 質 疑 応 答 ◆

第 1 四半期の実績に対する評価を聞きたい。

為替に助けられたこともあり、当社の想定よりは上に行っている。

売上面も同じ評価か。

利益が想定よりは若干上にいった。

海外は既に答えが出ていると思うが、第 2 四半期の業況をどうみているのだろうか。

報道どおり、特に半導体関係では韓国が順調、台湾は若干不調という傾向にある。

中国は、もともとレベルは高くはないが、ここに来てハイエンド志向になり、当社のサプライできるサービスに適応してきた部分がある。比較的好調に推移している。

スマートフォンの筐体に採用されつつあるアマルファは、前年同期比で変化はあるか。

可能性がある機種は、当時に比べて若干増えているが、期待していた物が余り出ていない。

EXE は、大型テレビ向け以外で期待されているのは通信分野だろうか。

非常に高密度なものであるということで特殊な HDI 基板、パッケージ基板、通信系とフレキの分野である。

在庫の減少は意図的か、それとも売れたのか。

意図的ではなく、売れたということである。

第 2 四半期以降増産という方向か、第 2 四半期以降の稼働率を伺いたい。

注文が順調に続けばほぼ 100%になる。

現在、建設費が高騰しているが、尼崎工場は予定投資額を超えることはあるか。

応札会社も多く、競争の論理が働くとみている。また設計会社とのやり取りの感触から、今のところ建設費の上昇はないとみている。

(平成 27 年 8 月 4 日・東京)

* 当日の説明会資料は以下の HP アドレスから見るができます。

<http://www.mec-co.com/ir/library/>